

Sanctuary

—— 逆転のダイナミックス ——

花 岡 秀

Sanctuary は1931年に出版された。それは Faulkner が既に、*Sartoris* (1929), *The Sound and the Fury* (1929), *As I Lay Dying* (1930) 等を発表し、Yoknapatawpha 郡 Jefferson という架空の町を彼の創作の場として確実に定着させた時期であった。つまり、Faulkner のいわゆる ‘Yoknapatawpha Saga’ と呼ばれる連作の世界が想像を絶するようなエネルギーで既に膨張し始めた時期に、この作品は出版されたのである。

しかし、この作品ほど様々な誤解を招き、また現在に至るまで多くの問題を投げかけてきた作品も、まれであろう。しかも、その誤解と多くの問題の渦中に、一般読者は勿論のこと、研究者に至るまでの多くの層を引きずり込んできたのである。

Sanctuary がこのように幾多の混乱を生じさせた原因はいくつか考えられるが、主として次の三点を挙げる事が出来るように思われる。まず第一には、*Sanctuary* で扱われた事件の異常性がその原因の一つに挙げられよう。まさに、Malcolm Cowley の言う “plainly incredible story”⁽¹⁾ が展開されるのである。一人の不能者による一女子大生に対する暴行、しかもトウモロコシの穂軸が使用されるといふ異常な事件は、それだけでも読者に様々な反応を呼び起こさずにはいないだろう。

第二には、この作品は初稿を書き直して出版されたという事実と⁽²⁾、Faulkner 自身がモダン・ライブラリー版 (1932) に付した作品成立の事情についての序が

挙げられよう。特に彼の、*“This book was written three years ago. To me it is a cheap idea, because it was deliberately conceived to make money,”*⁽⁶⁾ というその序の中に見出される言葉は、一般読者や研究者の間に、少なからぬ論議と混乱を引き起こしたのである。勿論、Faulkner のこの言葉を、文字通りそのまま受け取るわけにはいかないが、それでもこの序は、幾重もの波紋を読者ならびに研究者に投げかけたと言えよう。

第三に考えられる原因は、*Sanctuary* という作品自体に内在するものであるように思われる。つまり、この作品が、多岐にわたる解釈を可能にし、またそれを許容するだけの包容性を持っているということに帰着する原因である。このことは、作品の優れた点であると同時に欠点でもあるのだが、換言すれば、*Sanctuary* が持つ「曖昧さ」でもあるのではなからうか。例えば、Cleanth Brooks が端的に指摘するように⁽⁷⁾、Faulkner がこの作品において採った登場人物の描写方法も、この「曖昧さ」を生じさせる一因となっている。すなわち、Faulkner は、登場人物がある行為、又は決断を行なう場合、その動機を明確に提示することを、明らかに差し控えているからである。

しかし、この作品が醸し出す「曖昧さ」は、上述したような単一の層からのみ生じるものではなく、その他のいくつかの層から生じているように思われる。この「曖昧さ」を生じさせている多重層の中の一つの、しかし重要な層に光を当てることが、この小論において志向した観点なのである。

考察を進めるにあたり、まず Temple Drake と Popeye、それから Horace Benbow と Ruby の二組の登場人物に視点を定め、それぞれの関係を検討してみたい。それは、この二組の登場人物が、プロットとも関連して、鮮明な contrast を織り成していると考えられるためである。さらに言えば、彼等の相互関係が、この作品を「明らかに信じ難い物語」に構築する力学的な複合体を形成し、前述した「曖昧さ」を生じさせる要因と深く係っているように思われるためである。

彼等の相互関係を眺めた上で、*Sanctuary* に描かれた世界全体に目を移し、最後にこの作品の title についての一考を試みたい。

I

Sanctuary には、到る所に、不法、暴力、頹廃といった悪、及び、暗い倒錯した性の世界が描かれている。その中でも、最も不気味な恐怖と戦慄を読者に与え、いわば暗黒の世界を形成する存在、それが Temple Drake と Popeye の二人なのである。事件だけを表面的に眺めるならば、強姦された単なる被害者とその加害者という関係に過ぎない。しかし、そのような関係の表面下には、底知れぬ、暗い深淵が不気味に口を開いているのである。この深淵こそ、*Sanctuary* における測り知れぬ暗黒の世界に、より一層異様な陰影を投げかけている本質そのものでさえあるように思われる。

さて、大学生や町の若者達とも 適当に、楽しく遊び回っている 17歳の処女、Temple Drake は、Drake 判事の娘である。父の判事としての威信のもとで、自由気儘な生活を享受してきた彼女であるが、町の不良連中でさえも、“My father’s a judge.”⁽⁶⁾と何度も口真似することからも窺えるように、明確な自己の identity など持ち合わせぬ女の子でもある。さらに言えば、Temple Drake であること、すなわち Drake 判事の娘、としてしか自己の identity を把握出来ない娘なのである。大学構内での Temple は、常に軽やかに走り回る “speeding silhouette”⁽⁶⁾ そのものであった。どれ程楽しく華やかな生活を送っていても、其処での Temple は、あくまでも実体感を伴わない単なる ‘silhouette’ に過ぎなかった。

このような Temple が、ボーイ・フレンドの Gowan Stevens とともに、ふとした車の事故から、密造酒製造をやっている Popeye 一味の隠れ家へ足を踏み入れることになるのである。しかも、いくらでも逃げ出す機会がありながらも、彼女は其処に留まり、一夜を明かした翌日、結局 Popeye に陵辱されてしまうのである。

ここで、しばらく Popeye の方に目を移してみたい。まず最初に、Horace Benbow が初めて Popeye の姿を認めた次の部分に注目したい。

In the spring the drinking man leaned his face to the broken and myriad reflection of his own drinking. When he rose up he saw among them the shattered reflection of Popeye's hat, though he had heard no sound.⁽⁷⁾

細かく碎けて水面に映る自分の水影のなかに Popeye の麦藁帽子を、Horace は認めたのである。何一つ音を立てず、不気味に水面に映る存在として Popeye は登場する。彼の両眼といえば、“two knobs of soft black rubber”⁽⁸⁾ の様で、彼が漂わせている雰囲気といえば、“that vicious depthless quality of stamped tin”⁽⁹⁾ としか表現出来ないようなものである。その姿と醸し出す雰囲気が如何にグロテスクなものであろうとも、あくまでも肉体を具えた、「実体」としての Popeye の存在を印象づける描写であるように思われる。「柔らかいゴム塊」、「踏みつぶされた罐」といった表現は、少なくとも質量を具えた具体的な存在としての Popeye を読者に想起させる。

ただ、Popeye の何とも言えぬグロテスクさ、及び、病的としか考えられぬ、常軌を逸した数々の残忍な行為から、例えば、“amoral Modernism”⁽¹⁰⁾ といった、抽象的な次元で彼を捉えようとする視点も、それなりの妥当性を持ってくる。Popeye の内面に関しては、Faulkner が全くと言ってよい程描写を差し控えていることが、彼を現実的な「人間」として捉えることを困難にしていることも事実である。

しかし、Popeye はあくまでも、性病にかかった母親から生まれながらにして歪んだ心身を授けられた、実体としての存在なのである。最終章で明らかにされる Popeye の出生とその生立ちに関する、いわば自然主義的説明は、やはり、彼の質量、すなわち肉体を具えるものとしての存在に ‘reality’ を付与するものであるように思われる。このような Popeye が率いる一味の隠れ家に、Temple は足を踏み入れることになのである。

Old Frenchman place として知られる Popeye 一味の隠れ家で、Temple が目の当たりにした世界は、彼女がそれまで生きてきた世界とは全く異なるものであった。たとえ “Blind and deaf both”⁽¹¹⁾ であっても確実に一人の老人が生きて

いる、言葉など不要で、何の役にも立たぬ世界であった。また、Temple が目にした、何度も何度も洗いかえされ、レースの部分などはほつれて、つぎが当てられている “a woman’s undergarment of faded pink silk”⁽⁴⁾ に象徴されているように、時の重さが一刻一刻と刻まれている「現実」の世界であった。ここでも Temple は、何度も ‘My father’s a judge’ と繰り返すが、それもただ徒らに、空ろに響くだけで、この世界の「現実」としての重さをより一層増すだけである。

一味の Lee Goodwin の内妻、Ruby から聞かされる男と女についての話しも、Temle がそれまでに経験した浮ついた恋愛などとは完全に次元を異にした、膚で感じ取れる重さを持った「現実」の世界を、彼女に開くものであった。女のためには死を賭けて相手の父親と話しをつけようとし、実際に射たれる男、女の問題から他の男を殺す男、そういった男達と出会い、暮してきた Ruby は、Temple に次のように言い放つ。

“Man? You’ve never seen a real man. You dont know what it is to be wanted by a real man. . . . And if he is just man enough to call you whore, you’ll say Yes Yes and You’ll crawl naked in the dirt and mire for him to call you that. . . .”⁽⁵⁾

17歳の処女、しかも、神に祈る言葉を捜す時でさえ、“My father’s a judge; My father’s a judge”⁽⁶⁾ という言葉しか浮ばない Temple には、それは未だかつて踏み込んだことのない「現実」の世界を開く言葉であったに違いない。

こうしたなかで、Temple は Popeye に強姦されるのである。“Something is happening to me!”⁽⁷⁾ とは、まさに Temple が未知の世界、‘My father’s a judge’ という言葉を空虚にしか響かせない、「現実」の世界へ足を踏み入れることに他ならなかった。彼女が暴行される直前、すぐ傍で Popeye によって仲間の一人である Tommy が射殺される。しかし、それすらも Temple にとっては彼女を麻痺させる程の Popeye の実在感に一層の重さを加えるものに過ぎなかったのではなかろうか。

その後、Temple は Popeye によって Memphis にある Miss Reba の売春宿

に連れて行かれる。今や彼女は、実体を伴わない、‘My father’s a judge’としてしか identity を把握できぬ ‘silhouette’ などではなかった。暴行されることによって流れる自らの「血」、すなわち、“feeling her secret blood,”⁶⁴ “listening to the secret whisper of her blood”⁶⁵ という、確かな、自らの肉体を通じての感覚によって「現実」に係る存在であった。そして、ここ Memphis で繰り広げられる世界もまた、Popeye によって当てがわれた Red という若者によって目覚めさせられてゆく ‘lust’ により確かめられ、実感出来る「現実」の世界であった。

しかし、ここでもまた Temple は、Popeye による Red の殺害という、「死」を誘引する。彼女が踏み込んだ世界は、いわば、「死」によって裏打ちされた、強烈な現実の世界であった。例えば、「法」が志向するような、言葉や観念によって構築される世界とは対極に位置する世界であった。

従って、Popeye に出会ったことにより、Temple が辿った軌跡は、いわば「現実」を志向する軌跡であったと言えよう。しかもそれは、彼女自身の肉体に、残酷なまでに鮮明な里程標を刻みつける程のものであった。

II

Sanctuary における、いわば暗黒の世界を形成する中心的人物が Popeye と Temple であるとするれば、それに対して、たとえ僅かながらも、何らかの光を認められる世界を形成する中心的人物が、Horace Benbow と Ruby の二人である。この二つの世界は、いささか平面的ではあるが、「悪」と、これまた消極的な感懐は払拭し難いが「善」としても捉えることが可能でもあるように思われる。

Horace は、妻の Belle から逃れ、Kinston から Jefferson へ戻る途中、偶然 Popeye 一味の Old Frenchman place に立ち寄る。Temple と Gowan が其処に迷い込む四日程前のことである。そして Popeye によって射殺された Tommy の死体が Jefferson へ運ばれてきたことから、Horace は、嫌疑をかけられてい

る Goodwin の弁護をかって出て、Ruby とその赤ん坊の世話まで始めるのである。

Horace は十年前に人妻 Belle と結婚し、その連れ子 Little Belle と親子三人で暮らしてきたが、結婚生活における充足感を得られぬまま、妻と子供を残して家を出たのである。彼は Old Frenchman place で、自分の結婚について、Ruby に次の様に語る。

“... When you marry your own wife, you start off from scratch ... may be scratching. When you marry somebody else's wife, you start off maybe ten years behind, from somebody else's scratch and scratching ...”⁽⁹⁾

自分と結婚する以前の Belle の実生活の軌跡を絶えず意識してきた Horace の言葉ではなかろうか。しかも、Little Belle の存在が、その軌跡の存在を否定し難い、不動の事実に行っているのである。Horace にとっては、Little Belle こそ、如何に長い月日が経過しようとも、縮小するこの出来ない結婚生活における Belle との距離、すなわち「現実」との距離を象徴する存在であった。少なくとも、'ten years' という言葉に、Horace と「現実」との間の距離を窺えるように思われる。

Horace はまた、結婚以来十年間、毎週金曜日に Belle の好物である海老を駅まで取りに行き、それを家まで持って帰ってきた話を Ruby に聞かせる。

“... All the way home it drips and drips, until after a while I follow myself to the station and stand aside and watch Horace Benbow take that box off the train and start home with it, changing hands every hundred steps, and I following him, thinking Here lies Horace Benbow in a fading series of small stinking spots on a Mississippi sidewalk.”⁽¹⁰⁾

妻の好物の海老を駅まで取りに行き、それを持ち帰るという行為も、Horace にとっては、自ら客観的に眺めることの出来る現実に過ぎない。こうした結婚生活は、'a fading series of small stinking spots on a Mississippi sidewalk' に過ぎず、現実感を伴わない空ろなものであった。Horace に充足感を与えてくれるような現実であるよりも、常にそれを客観的に眺める観念的な世界に彼を引き入

れるような生活であった。一人娘の Little Belle も、Horace とは血の繋がりを持たず、彼を現実の結婚生活に結びつけてくれるような存在ではなかった。

それと同時に、Horace の職業も、弁護士という、いわば言葉、論理、そして思考の領域に成立する「観念性」の強い傾向にあるものであった。この事実も、Horace が現実との係りの希薄な観念的な世界に生きる人間であることを、端的に象徴するものではなからうか。Michael Millgate は、このような Horace を “the intellectual of generous impulses but inadequate courage or will to action, tending always to dissipate his energies in talk”⁶⁰ と、実在的確に捉えている。行動力に欠け、常に自己の力を「話す」という非常に観念的なことだけに費やしてきた Horace が、Goodwin の弁護を自ら引き受け、Ruby と協力して裁判に臨むのである。

Goodwin の内妻 Ruby は、愛する Goodwin のためなら如何なる犠牲を払っても悔いない女である。Goodwin が刑務所へ入れられれば、自分の身体を犠牲にしても、あらゆる手段を尽くして、彼を其処から出そうとするし、彼が服役中は、常にまともな仕事をして自分の生計を立てながら、彼を待つような女である。観念的な言葉などを媒介としてではなく、自らの身体と行為を通して、現実的に ‘what it is to be wanted by a real man’ を経験し、知ってきたのである。

このようにして生き抜いてきた Ruby は、Horace に支払う弁護士料がないため、自分の身体で支払うつもりであったことを彼に告げる。それを知った Horace は、“O tempora! O mores! O hell! Can you stupid mammals never believe that any man, every man — You thought that was what I was coming for? . . .”⁶¹ としか言えなかった。これらの言葉に聞き取れるものは、現実から遊離した intelligentsia の言葉にしばしば特有の、空ろな観念の響きのみであるように思われる。また、いわば outlaw の世界で、荒涼とした日々を送りながらも、片時も自分の赤ん坊を離さぬ Ruby の姿は、Horace と Little Belle の血を介さぬ関係と鮮やかな対照を見せている。

Ruby が体現する現実生活におけるこうした「したたかさ」は、Horace が陥

っている観念的な世界の空しさをより一層際立たせるものであろう。彼女は、自らの身体と行為を通して生き抜いてきた帰結として、“I always thought of Him as a man,”⁸⁰と Horace に語る。若い時には、自分の父親にその恋人を射たれ、また男を愛すれば、その男のためなら如何なる犠牲をも払い、様々な男達を相手に、自分の身体で生き抜いてきた女の言葉であろう。彼女にとって、神とは抽象的な言葉で表現されるような存在ではなく、あくまでも具体的な「男」としての存在であった。

Horace にとって、Goodwin 弁護を引き受け、Ruby と接することは、それまで彼が生きてきた、いわば「観念的」な世界から「現実」の世界への移行を意味したのである。だから Horace が辿った軌跡も、その質に関しては差異が認められるとしても、Temple のそれと同様に、少なくとも、現実を志向するものであったように思われる。

III

I, II 章において、それぞれ Temple と Popeye, 及び Horace と Ruby の二組の登場人物を眺めてきたが、その結果、何れからも、いわば「観念」的な世界と「現実」の世界という対照が浮彫りにされた。Edmond L. Volpe も、Horace に関してではあるが、“the world of his illusions and the world of his actual existence”⁸¹と、この対照を指摘している。Temple と Horace 両者について、「現実」を志向する軌跡を認めることが出来たのであるが、ここでさらに、その後の二人の跡を追ってみなければならぬ。

Temple は、最終的には、Tommy 殺しに関する Jefferson での裁判に、父親と兄弟達に付き添われて出廷し、Goodwin に不利な偽証をする。そして、そのまま父親とともにヨーロッパへ発つ。彼女は再び以前と同じように、父によってしか自己の identity を把握出来ない世界に舞い戻ったことになる。特にヨーロッパへの出立は、現実逃避の印象を読者に与えずにはおかないように思われる。

一方 Horace は、Temple の偽証により裁判に敗れる。その結果、Goodwin は Jefferson の暴徒に私刑にかけられ、生きながらにして焼き殺される。危うく Horace まで、Goodwin を弁護したために、私刑にかけられそうになる。そして、結局、彼は Belle との以前の生活に戻ることになる。だが、Horace が辿り着く場は、裁判が終わる以前から、既に彼自身の言葉に予示されていたと言えよう。

“I’ll finish this business and then I’ll go to Europe. I am sick. I am too old for this. I was born too old for it, and I am sick to death for quiet.”⁶⁴

Temple のヨーロッパへの出立を思えば、実に皮肉な響きを覚えざるを得ない言葉である。Horace も、結局、いわば現実から遊離した、「観念」的な世界に再び戻ることになる。

Temple も Horace も、ふとした偶然から Popeye 一味が引き起こす一連の事件に巻き込まれた。そして彼等と接することにより、自分達がそれまで暮してきた世界とは全く異なる世界に足を踏み入れたのである。しかもその世界とは、Tommy, Red, そして Goodwin の死によって裏打ちされた、残酷なまでに鮮明な「現実」の世界であった。だが、最終的には、Temple も Horace も、再び以前と何ら変らぬ、いわば「観念」的な世界に戻ったのである。このように、二人の軌跡を辿ることによって浮彫りにされた、まさに相対する世界、「観念」的ならびに「現実」的世界は、Volpe の言葉を借りるなら、‘illusions’ と ‘actual existence’ とも呼ぶことが出来るものである。いささか図式的な捉え方をすれば、Sanctuary の世界は、この二つの世界によって構築されているときえ言えるように思われる。

ところが、Faulkner は、この二つの世界に、実に複雑な陰影を与え、そこから有機的、かつ力学的な複合体としての Sanctuary の世界を構築しているのである。

上述したように、我々は、Temple と Horace の軌跡にいわば「現実」志向を見たわけであるが、その到達点は、結局、もとの「観念」的な世界であった。し

かし、この結末は、読者を一種の混乱に陥らせる。すなわち、これまで「観念」的なものとして眺めてきた Temple や Horace の世界こそ ‘actual existence’ であって、この二人が Popeye や Ruby と接することによって踏み込んだ世界が、実は ‘illusions’ の世界であるかのような印象を、この結末は読者に与えるのである。

Horace は裁判が終わる前から、“I need a change. Either I, or Mississippi, one”⁶⁸と漏らす。彼が「現実」を志向しながらも、どうしても抜け出すことの出来ぬ「現実」を逆に示唆する言葉であろう。あくまでも「現実」を志向しながら、彼が抜け出すことが出来ぬ世界もまた「現実」なのである。結局は、そこでしか生きられぬ Horace の絶望感は、次の一節にまざまざと披瀝されていると言えよう。

Better for her if she were dead tonight, Horace thought, walking on. For me, too. He thought of her, Popeye, the woman, the child, Goodwin, all put into a single chamber, bare, lethal, immediate and profound: a single blotting instant between the indignation and the surprise. And I too; thinking how that were the only solution.⁶⁹

Temple にしても、Popeye との接触による様々な経験は、再び彼女が父のもとに戻った途中経過に関しては何一つ語られていないため、いわば束の間の出来事で、まるで何事も起こらなかったかのような印象をさえ読者に与える。彼女が通り抜けた残酷なまでに鮮烈な「現実」も、‘illusions’ でしかなかったのではないか、という錯覚すら読者は抱くのではなからうか。

しかし、ここでも Faulkner はそれだけの周到な計算を怠ってはいない。例えば、Popeye に陵辱されるまでの経過を、Temple が Horace に語る部分では⁷⁰、Faulkner は、深層心理とさえ呼ぶことが出来る次いで Temple に語らせている。しかもその部分は、非常に巧妙に読者を深層心理の世男に引き入れることに見事に成功していると言えよう。この語りのくだりを聞く読者は、知らず知らずのうちに現実を離れた深層心理の淵に吸い込まれ、Temple の一連の経験が、単なる

‘illusions’ に過ぎなかったのではないか、といった錯覚に陥るのである。

また、一連の事件と場との関係も、この ‘illusions’ と ‘actual existence’ の問題に係っているように思われる。

裁判が開かれ、そこで Horace が彼なりに、無実の Goodwin の弁護に努力する場は、Jefferson の町であった。そこは、Horace 自身も生まれ育った町であると同時に、時の流れが様々な変化をもたらしたとはいえ、例えば、彼の妹、Narcissa や、Sartoris 家の Virginia Du Pre に認められるような、いわば Old South の呪詛の影をどこまでも引き摺る場であった。Horace が裁判に敗れた直接の原因は Temple の偽証であったが、陰で彼の弁護を妨害したのは、常に世間体を気に懸ける Narcissa であり、過去からの呪詛に囚われたその住人であった。それこそ、Horace が ‘I need a change. Either I, or Mississippi, one’ と嘆いた「現実」そのものではなかったか。しかし、Horace にそのように嘆かせたこの「現実」は、その呪うべき過去を包括した南部そのものに纏わる ‘illusions’ に他ならなかったとも言えるのである。

それに対して、Temple が一連の経験をした場は、Jefferson の町から離れた Old Frenchman place であり、Memphis の町の売春宿であった。前者は今や人も寄り付かない所であり、後者は、刹那的、頹廢的で、言うならば過去の束縛などからは解放された所であった。つまり、Temple が痛ましいまでの現実感を経験した場は、今や人に忘れかけられている廃屋であり、また、刹那の快樂を求めて男達が来ては去って行く遊里、両者ともいわば様々な ‘illusions’ を生み出すような場であったと言える。

こうした事件と場との関係も、‘illusions’ と ‘actual existence’ の逆転に微妙な影響を与えているのである。

Temple と Horace の、いわば「現実」志向といった軌跡を追うとともに、Sanctuary を構築している ‘illusions’ と ‘actual existence’ の二つの世界をここまで眺めてきて痛感することは、ほかならぬこの二つの世界の相対的關係こそ、この作品に認められる「曖昧さ」を生じさせている原因の一つとなっているとい

うことである。すなわち、その相対的關係が逆転可能な力学的關係に設定されているところに、この作品の「曖昧さ」が生じているように思われるのである。勿論、初めに Brooks の見解を援用したように、登場人物の描写方法も、この二つの世界の逆転をより一層可能なものにしていくように思われる。さらに、Faulkner が自ら “the most horrific tale I could imagine”⁶⁰ と言っているように、ここで扱われている事件の異常さも、この二つの世界に一層大きな断層を与え、そこに力学的關係を生じさせるエネルギーとなっているのである。

IV

Sanctuary は、いわば ‘illusions’ と ‘actual existence’ の相対的なダイナミックスの上に構築されているわけであるが、このダイナミックスと複雑に関連して、これをさらに効果的にしているものに、作品中に見出されるいくつかの ironical な contrast が挙げられる。それらは、この作品の title を考察する上でも、少なからず重要な意味を持つものであるように思われる。

まず、Temple と Popeye に関しては、判事である父親のもとにある Temple と、無法の世界に生きる Popeye とから、‘law’ の世界と ‘outlaw’ の世界という contrast が浮び上がる。また、Temple には母親が欠けており、Popeye には父親が欠けている事実も、不気味な対照を成す。Temple が Popeye を、しばしば “daddy”⁶¹ と呼んでいる事実は、この対照が孕む問題を示唆して余りあるものであろう。しかも、処女である Temple が、生まれながらの不能者である Popeye によって変質的に、陵辱され、その後は、Popeye が彼女にあてがった Red によって、彼女の lust が目覚めさせられてゆく過程を見れば、これらの contrast は irony 以外の何ものでもないことがわかるだろう。

また、Horace と Ruby についても、同様の contrast が窺える。たとえ妻の Belle が再婚とはいえ、正式に結婚をしている Horace と、あくまでも Goodwin とは内縁関係でしかない Ruby、しかも、先に述べたような、それぞれの生活を

思えば、まさに *ironical* な *contrast* と呼ばざるを得ない。この二人に関しても、‘law’ と ‘outlaw’ の *contrast* に彩られていることは勿論のことである。

或いは、Jefferson における Narcissa の、南部の lady 特有の固陋なものの考え方と、Memphis の売春宿の女主人 Reba の示す、伸びやかで、因襲などにとられぬ考え方も、*ironical* な対照を見せる。

Popeye 自身についても、Tommy 殺害の罪を Goodwin に負わせながら、自らは Alabama で起きた警官殺しの容疑で逮捕され、無実の罪で処刑されるという *ironical* な人生を送ったことが、最終章で語られている。Horace が、法により正義を守ろうとしながらも、その法によって敗れた事実と、このような Popeye の人生も、まさに *ironical* な *contrast* を織り成している。

こうした一連の *ironical* な *contrast* も、‘illusions’ と ‘actual existence’ に逆転の可能性を与えている一因と言えよう。それは、こうしたいくつかの *contrast* が、‘illusions’ と ‘actual existence’ の間において、恰も位置エネルギーによるずれを生じさせるかのような働きをしているように思われるためである。

ironical としか呼びようのないこうしたいくつかの *contrast* で彩られた *Sanctuary* の世界であるが、その何処にも、文字通りの ‘sanctuary’ を見出すことは出来ないように思われる。また、‘sanctuary’ という語そのものも、この作品中には一度も用いられていない。ただ、“sanctified”⁸⁰⁾ と “sanctity”⁸¹⁾ という二語のみが、‘sanctuary’ という語を指向するものとして見出せるだけである。しかも、両者とも、偏狭で固陋な道徳観しか持ち合わせぬ Jefferson の教会の婦人達を *ironical* に批難するのに用いられているだけである。

敢えて、‘sanctuary’ という語が辞書の上で具える属性に、この作品の title としての意味を求めるならば、“A church or other sacred place in which fugitives formerly were immune to arrest or punishment”⁸²⁾ という語義に注目せざるを得ないのではなからうか。Popeye ですら、無実の罪で処刑されるに至っても、何の抵抗も示さずに、死をもって自らの人生を完結させたことを思えば、Goodwin 私刑を招く直接の原因となった偽証罪を犯しながらも、依然として

‘immune’な状態にいる Temple を想起せざるを得ない語義である。しかも、‘temple’という語こそ、まさに‘church’及び‘sacred place’に重ね合わせる事が出来る語であることを思えば、‘sanctuary’という title に、不気味で ironical な Temple Drake の影を認めざるを得ないのである。

従って、Sanctuary というこの作品の title は、およそ‘sacred place’などと対極を成すようなこの作品に描かれた世界を ironical に暗示するとともに、これまた払拭し難い irony を湛えた Temple Drake の影を示唆するものであるように思われる。

注

- (1) Malcolm Cowley, “Introduction,” *The Portable Faulkner* (New York: The Viking Press, 1976), p. xix.
- (2) Cf. Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1963), pp. 113-118. ここで Millgate は、初稿と出版された版についての簡潔な比較を行なっている。
- (3) William Faulkner, “Introduction,” *Sanctuary* (New York: Modern Library, 1932), p. v., quoted in Lawrance Thompson, *William Faulkner: Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1967), p. 99.
- (4) Cf. Cleanth Brooks, *William Faulkner: the Yoknapatawpha County* (New Haven: Yale University Press, 1977), p. 119.
- (5) William Faulkner, *Sanctuary* (London: Chatto and Windus Ltd., 1966), p. 19.
- (6) *Ibid.*, p. 18.
- (7) *Ibid.*, p. 1.
- (8) *Loc. cit.*
- (9) *Loc. cit.*
- (10) George Marion O’Donnell, “Faulkner’s Mythology,” *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (Michigan: Michigan State University Press, 1960), p. 88.
- (11) William Faulkner, *Sanctuary*, p. 30.
- (12) *Ibid.*, p. 28.
- (13) *Ibid.*, p. 39.
- (14) *Ibid.*, p. 34.

- (15) *Ibid.*, p. 68.
- (16) *Ibid.*, p. 92.
- (17) *Ibid.*, p. 100.
- (18) *Ibid.*, p. 10.
- (19) *Ibid.*, p. 11.
- (20) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1971), p. 117.
- (21) William Faulkner, *Sanctuary*, p. 189.
- (22) *Ibid.*, p. 193.
- (23) Edmond L. Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (New York: The Noonday Press, 1974), p. 142.
- (24) William Faulkner, *Sanctuary*, p. 179.
- (25) *Ibid.*, p. 90.
- (26) *Ibid.*, p. 159.
- (27) cf. *Ibid.*, pp. 147-151.
- (28) William Faulkner, "Introduction," *Sanctuary*, p. vi.
- (29) William Faulkner, *Sanctuary*, p. 159.
- (30) *Ibid.*, p. 124.
- (31) *Ibid.*, p. 125.
- (32) *The American Heritage Dictionary of the English Language*, ed. William Morris (New York: American Heritage Publishing Co., Inc., 1973), p. 1148.